

## 横山正彦教授の追悼号発刊によせて

経済学部長 古 庄 正

経済学部教授横山正彦先生は、1986年1月以来、胃潰瘍のため虎ノ門病院において加療中であったが、肺炎を併発され、同年3月8日午後9時23分68歳で急逝された。

先生は1917年に長野県にお生まれになり、1941年東京帝国大学経済学部を卒業された。大学卒業後、一時社団法人銀行集会所事務局調査課、あるいは全国金融統制会調査部調査課に勤務されたが、敗戦後の1946年東京大学経済学部に赴任され、1978年、停年で御退職になるまでそこで教鞭を執られた。戸田武雄教授の後任者として、当経済学部が先生をお迎えしたのは1982年4月のことであった。この間先生は土地制度史学会理事、経済学史学会常任幹事、日本経済政策学会常任理事、経済理論学会幹事、日仏経済学会理事、アダム・スミスの会幹事等をつとめ、学会役員として八面六臂の活躍をされるとともに、東京大学評議員、駒沢大学大学院経済学研究科委員長をも歴任、両大学の運営にも貢献された。

先生の御研究は経済理論、経済学史、経済政策等の広い分野にわたったが、その中心をなすものは、やはり経済学史、ことにフランソア・ケネーに関する研究であった。「ケネー解釈に関する覚書」(『歴史評論』第2巻第2号、1947年)をもって開始された先生のケネー研究は、その後「ケネー商業論とその歴史的意義」(『経済評論』第3巻第3・4合併号),「フランソア・ケネー研究序説」(『経済学論集』第19巻第2号),「フィジオクラートの等価交換論と貨銀論」(『経済学論集』第20巻第6号),「ケネーの農業資本主義論とその歴史的意義(一)

(二)」(『経済学論集』第21巻第1号, 第23巻第2号), 「ケネーの経済循環論について」(『経済研究』第7巻第1号)等の諸論文により深められ, 1958年にはこれらの諸論文をもとに名著『重農主義分析』(岩波書店)を完成された。同書はケネー研究の水準を画期的にひき上げただけでない。経済学説を生きた現実的基盤との関連においてつかみ直し, その基本的性格を明らかにすることによって, 経済学史研究に新たな地平を切り開いた労作であった。ケネー研究者としての先生の地位は, この研究によって不動のものとなった。

しかし, 先生はこうした理論活動と同時に, マルクス経済学の普及と日本の民主化のためにも労を惜しまれなかった。先生は多くの啓蒙書や論文を書かれただけでなく, かららずしもお丈夫ではなかったにもかかわらず, 請われれば講習会や研究会や労働学校に出かけられ, その信ずるところを説かれた。先生の教えを心の糧として, 平和と民主主義のために献身されている人は少なくない。『資本論』は大学教授にはわからなくても, 労働者には理解できる, という若き日の先生のお話は, 深い感銘をもって今も人々の心に生きつづけている。国家権力によるたび重なる民主主義の空洞化を座視しえず, 学者・文化人の先頭に立ってこれにプロテストされつづけたのも先生であった。先生は, まさに真摯な学究であると同時に行動の人でもあった。

先生は自然を愛し, 文学を好むロマンチストであり, 真正直で責任感のつよい方だった。それだけに, 大学の業務についても手抜きをするようなことはできなかった。月に一度開かれる教授会には, いつも定刻前においでになり, 背筋をぴんとのばして, 長時間にわたる議論に耳を傾けられていた。年配者には少々骨の折れる入試監督などにも, いやな顔ひとつされず, きちんとつき合って下さった。学問離れのひどい学生諸君の指導には, かなり手を焼いておられたようであるが, 決してなげやりにはされず, この問題に真剣に取り組まれていた。先生の御入院後, 私たちを悩ませたのは期末試験の採点をどうするのか, ということであった。経済学部教授会は別の経済原論担当者に先生の代行をお願いすることに決定, その旨を先生にお伝えした。しかし, 先生はこれを断られ, 熱に冒されながらも, 病床の中で自ら採点され,

横山正彦教授の追悼号発刊によせて（古庄）

その結果を奥様をわざらわして大学まで届けて下さった。深い雪の日の午後のことであった。その時の奥様の安堵された御様子を、私は今も忘れない。それは多分、困難な中にも責務を果たされた先生御自身のお気持ちでもあったろう。

東京大学経済学部と駒沢大学経済学部との合同でとり行われた豊島区雑司谷の崇祖堂での先生の告別式には、多くの友人・知人や教え子たちが参列し、献花をもって先生とお別れした。マルクス主義者としてその生涯を無宗教で貫かれた先生の生きかたをそれは象徴していた。学問について、人間の生きかたについて先生の教えを乞わなければならないことばかりであった。にもかかわらず、それが果たされないまま先生が他界されたことは、何としても残念でならない。経済学部教授会はありし日の先生を偲び、ここに『経済学論集』第18巻第4号を先生の追悼号として発刊することとした。先生の御冥福をお祈りしつつ、御靈前に慎んでこの論文集を捧げたいと思う。

1987年1月29日